



自殺ゲーム



鋼虎徹

人には様々な生き様がある。産まれた場所や時代、もしくは育った環境、親の事情。学校という小社会に感化され、本物の社会に飲まれたあと。そして、その後。生き様は常に目の前にありつづけ続けている。それと同時に想像もつかないほど分岐に富んでいる。

例えば、あるひとりの中年を例にとってみよう。そいつは、28歳にもなって自殺幫助なんてことを生業にしている。例えば、ある晴れた平日の朝、そいつは丸の内にあるビジネスビルの屋上で昨日、一昨日と続き自殺しようとしているオッサンをみているわけだ。一般人には異常に見えるかもしれないが、どうということはない。文字通り、ビジネスビルの屋上に初老のオッサンとオッサンにこれからなる中年がいるだけなのだから。冬が過ぎ春を迎えようとしていた季節。屋上に吹く風はまだ肌寒い。

「君、松本とか言ったね。今、何歳なんだい？」

「俺ですか？ 28です」

「つまらない冗談だね」

本当のことなのだが、俺は高級そうなスーツを着込んだ白髪まじりの初老のオッサンを見た。ディオールの黒縁メガネがよく似合っている。とてもこれから自殺しようという面ではない。その点、俺はというと青山で買ったリクルートのスーツ。どこで差がついたのか。

「鈴木さん、そのスーツ高そうですね。よかったら俺のと交換しませんか？」

「君のスーツと？ はじめて会ったときから気になってたんだが、君の着ているスーツは、もしかしてリクルートというものではないかね？」

「正解です。青山の閉店安売りしてたやつですよ。俺、これしかもってないもんで」

「これしかって。もっといいものを着ないとダメだよ」

「そう言われましても、手持ちがないもので」

「キートン、ブリーオーニ」

「はい？」

鈴木さんは呆れた顔で言った。

「キートンは六本木に、六本木ヒルズ店がある。ブリーオーニは銀座に、銀座店がある。今度行って見なさい。少々、値は張るがそこのを買っておけばのちのち役にたつだろう」

「はあ、でも、手持ちが・・・」

「今すぐでなくてもいいじゃないか。人生はながい。焦る必要なんてこれっぽっちもないん

だよ？」

「はあ・・・」

「今日は辞めだ。やはり飛び降りには私には向かない。もし下に人がいて運悪く接触でもしたら目もあてられない。今日は辞めだ。日を改めよう」

「はあ・・・」

「君、これから予定は？ どうだい少し酒でも付き合ってくれないか？」

「またですか。俺あんまり飲めないんですけど」

「飲めなくてもいいさ。話し相手になってくれれば、それで」

このオヤジ、いや、オッサンは本当に自殺する気があるのだろうか。未遂に終わって今日で3日目だ。

「鈴木さん、契約のことなんですが・・・。キャンセルでもいいですよ。なにも俺は殺すためにいるんじゃないんですし。金さえもらえれば、なかったことにできるんですけど」

俺は申し訳なさそうに鈴木さんに聞いた。敬語というものをあまりしらない俺にとって実社会に出れば社長の風格を漂わせている鈴木さんにこういうことは言いづらい。

「気にするな。金ならちゃんと出す。延長金もな」

風俗じゃねえんだから・・・。俺はそう言いそうになって諦めた。

¥

鈴木さんとの会食を前に、俺は安城に電話をかけることにした。安城とは俺の上司といえど変だが、この自殺幫助の企画者であり、ビジネスとして運用している組織の幹部だ。手っ取り早く言うとヤクザである。電話をかけていつも1回目のコールで応答してくる。ヤクザはヤクザなのだが外見、中身ともにやり手のビジネスマンだ。みすばらしい自他ともに認める無能な中年とやり手のビジネスマン。そんな反りの合わない相手に電話するのだから毎度のことながら緊張する。今日もきっかりと1コール目で安城が電話に出た。

「松本です。今回も保留ということになりました」

「そうか、わかった。契約通り延長料金はこっちで請求しておく。誠司はこれからまた一緒に飲みに行くのか？」

「ええ、そうですね。そうになりました」

「生きるか死ぬか、まあ大した問題じゃないが今回もたのむ」

ブツリッと一方的に切られてそれで終わり。『生きるか死ぬか大した問題じゃない』そう言って電話を切る相変わらずの冷酷ぶり。俺はため息をついていると鈴木さんが心配したのか声をかけた。

「心配することはない。金ならちゃんと振り込むさ。弁護士にまだ見つかってない、別の口座があるんだ」

あっけらかんとしている鈴木さんに俺はつい本音を訊いた。

「でも、振り込むとなると履歴が残るんじゃない？」

「心配いらないよ。日本の銀行とは違って海外の守秘性の高い口座を利用してるからね。そう簡単にはいかないさ。安城さんもそうそう馬鹿じゃなかろう」

それはそうだろう。あのインテリヤクザのことだ。自殺幫助で金儲けなど無駄にリスクの高いことをするのだからそれなりの手は打っているはずだ。

「君は、安城さんの部下だろう？」

「部下というか、そういうものではなくて使いつ走りというか・・・」

「なにか、弱みでも握られているとでも？」

俺はいい加減、問答に鬱陶しくなって素直に「はい」と答えた。

「まあ、私が詳しく話を訊く立場ではなかった。すまなかったね」

年上に謝られるというのは、性格上どうしても歯痒いものがある。

「いいんです。それより、飲みに行きましょう」

銀座のいかにも高級そうな天ぷら屋に地下鉄を乗り継いで俺と鈴木さんは来ていた。すでに時間も夜の混み合う時間帯である。あらかじめ予約していたという鈴木さんは、その店の常連らしく女将らしき人と立ち話を済ませると俺たちを個室へと案内した。

『とりあえず、生ふたつ』などとは言える雰囲気ではないので、飲み物から全て鈴木さんにお任せしていた。

「しかし、なんだね。誘っておいてなんだが、君は私といるところを他の人に見られておいて後になって怪しまれないかね？」

「ああ、はい。問題ないです。そのあたりはうちのほうでいくらでも偽造できますので。遺書にも怪しまれないようにしてますし、正直、組織に内通者なんて腐るほどいるので」

ほう、っと関心したように鈴木さんは言った。

「そんなことまで喋っていいのかい？ もし私がおとり捜査官だとしたら？」

「ありえません。身辺調査ぐらいとっくに済ませてあるので」

今度は、ふふっと笑って鈴木さんが笑った。

「君は、・・・松本さんはこの仕事、ながいの？」

「実は去年の末からなんです。引き継いで、やることになりました」

「やることって？ 前任の人がいたんですか？」

「実は俺で3人目です。前任の担当者は死にました」

さらっといってから少しだけ間があいた。口が滑ってしまった。

「殺されたのか？ 口封じに？」

「・・・秘密です」

俺がニッコリと笑うと、それ以降、鈴木さんは組織のことについて訊くことはなかった。

こういう場所では順番に料理が運ばれるようなのだが、鈴木さんは前もってゆっくりと話ができるようにと、できるだけまとめて料理をもってくるように言っていたそう。俺は懐石料理と和食の区別などとうにわからないので、とりあえず出された料理を片っ端から食っていく。鈴木さんは俺の下品な食いつぶりなどおかまいなしにどうやったら楽に死ぬるか、そんなことばかり聞いてくる。ひとときの時間だが、生きようとする者と、これから死のうとする者がひとつの席で語り合う。なんともおかしな光景である。

「小説でこんなことがあったんですよ。べろんべろんに酔っ払った後に、他者から注射器でウオッカを注射する。すると意識が朦朧としているので気付かないんですが急性アルコール中毒で確実に死ぬます。気付かないといっても心臓が張り裂けそうとか書いてありましたけど。試したことないんで痛いのかわかりませんが。酒の代わりに覚醒剤でもいいかもしれませんね。どっちが楽かはわかりかねますが」

「もっと、シンプルに逝きたいんだが」

「シンプルですか？ 首吊りとかどうです。でもまえもって2, 3日は食事を控えたほうがよさそうですね。筋肉が弛緩しきってケツの穴からクソが垂れるといますから」

ムシャムシャと美味しい飯を食いながら（俺が一方的に）お互いに語り合う。俺は酒があまり飲めないで烏龍茶にしているが、鈴木さんは日本酒から白ワインに変えたようだ。

「自殺といってもそう簡単には逝きません。案外、服毒が一番難しいですね。致死量に達する前に身体が拒絶反応を示すんです。もちろん、毒性が強いものならば少量で済みますが、どちらにしても苦しんで死にますね。鈴木さんは綺麗に死にたいですか？」

多少、酔いがまわってきたのか鈴木さんの口調が柔らかくなってきた。

「これから死ぬというのに、綺麗も汚いもあるか。死ぬればそれでいい」

俺だって好きでこんな話をしているわけではない。どうすれば自殺者から多く金をふんだくれるか。そのための方法はないか。それだけである。

「では、こうしましょう。薬を飲んだあとに、米噛みを2, 3発拳銃で撃ちぬくんです。撃つことにためらうようならタイマー式のものを使いましょう。それとも派手に爆破しちゃいますか。人生の最後に相応しい花火というところですよ」

これから死のうとしてしている自殺者に情がわくことはない。早く死んでくれないと次の鴨の相手ができないのだ。とっとと終わらせなければいけない。

「・・・わかった。薬と拳銃をつかう。一度、撃つてみたかったんだよ。どんな感触なのか、最期に知りたい」

「わかりました。では、明日。それで逝きましょう」

こうなることなどわかっていた。こっちはビジネスだ。金が詰めるというのならどんなものだって用意してやる。いや、最初から用意していた。ただ、それ相応の金を出させる過程も俺の仕事のうち。明日で、この案件は終わらせる。

¥

次の日の午後、俺と鈴木さんは港町にある地下室にいた。今日は全てにおいて滞り無くことが進んでいた。ここから先はキャンセル不可だ。もし、ここで鈴木さんが死にたくないなどといったら、俺が鈴木さんを撃ち殺す手はずになっている。いや、昨日、鈴木さんに訊いたこと『キャンセルでもいいんですよ。なにも俺は殺すためにいるんじゃないんですし』あれは、嘘だった。途中でキャンセルなんかさせてみる、どこに情報をばらすか分かったものではない。死という誰かが経験しなければならぬが、最期まで分からないその不安。それこそが不安なのだ。人は脆い。どんな人間であろうとも。どんな経験をしてきたとしても。鈴木さんが死に急ぐ理由など知りたくもないが、生きているうちだけなのだ。人としての価値は。

だからこそ、その不安ごと、消さなければいけない。見届人の本文は人生の最期のケジメをつけさせる仕事だ。

「どういうことだ、おい!!」

鈴木さんは確かにそこにいた。身ぐるみ剥がされ手足を縛られたその状態のまま。黄土色に照らされた電球しかない部屋にバンザイをさせられた体制のまま拘束された鈴木さんが言った。見てくれはコンクリート打ちっぱなしだが防音処理も換気もそれなりにきちんとしてある。組織で管理している処刑場だった。

「どうも、こうもないですよ。今日は4日目ですよ。契約書、読んでないんですか？」

「金なら延長金払っただろ？」

「延長金は確かに確認しました。でも、違うんです。俺は契約書のことを訊いたんですよ。3日。その期間を過ぎてしまえば保証対象外。読まなかったんですか？」

「・・・保証対象外だと？」

「鈴木さん。なぜ、契約書をよく読まなかったんですか。自殺の自由意志は3日以内。それを過ぎれば、あとは私どもの意向に従ってもらおう。そう書いてあったはずですが」

「ふざけるな。そんなことどこにも書いてなかったぞ」

言い訳がましいオヤジに俺はなれない営業スマイルで言った。

「ケジメです」

「は？」

「これは、双方のケジメなんです。一度、自殺を願った。願うだけなら自由です。でも、その意思を我々はビジネスとして請け負ったのです。請負責任。私どもは、その責務を果たさなければなりません。たとえ、どんな理由があっても。一度依頼された仕事は最後まで責任をもつ。残念ですが、鈴木さん。あなた、自殺する気が失せたでしょう？」

鈴木さんは押し黙った。当然、予想の範囲内だ。

「では、こうしましょう。足枷は残しますが、右手の手枷は外します。そしてここに・・・」

俺は準備していた拳銃を鞆から取り出して鈴木さんに見せた。自衛隊で使われるオートマ式P220である。

「よくできてるでしょう？ 実は本物なんですよ、これ。銃弾は1発のみ装填してあります。鈴木さん、これで俺の目の前で自分の米噛みを撃ちぬいてみせてくれませんか？」

俺は鈴木さんを試すように見ていった。全裸の鈴木さんは表情を青ざめながらも、初日に出会ったような、くすんだ目になっていった。

「1度つきりです。俺にケジメを見せて下さい。鈴木さんの意志を尊重するために薬はもってきませんでした。こんなときに使ったら、鈴木さんのためになりませんしね。自分の意志で引き金をひいてください。そうしないと報われないと思うんです」

手枷を外し、拳銃を渡した。鈴木さんが自殺する瞬間を見届ける最良の位置まで下がり微笑んだ。予想外に重量感のあるそれは触ってはじめて本物だとわかる。鈴木さんは命を消すただの道具を手にし無表情になっていた。

「安全装置は解除してあります。いつでも。鈴木さんのタイミングで逝ってください」

血の気の失せた空気。決して重くはないが肌寒い。蒼白の表情をしながら本物の拳銃という物質の重さを確かめるようにゆっくりと米噛みに標準を合わせた。くすんだ黒い目がディオールの黒縁メガネから見えた。俺と鈴木さんの目が合った。俺は視線を外さなかった。

「見せて下さい。その意志」

俺が言い終わる前に鈴木さんが叫んだ。

「死ね、外道!!!」

弾は発射されなかった。

シンと静まり返る地下室。

「残念でした。弾は入れてません」

拳銃を鈴木さんの硬直した手から丁寧に抜き取る。

「実は、賭けをしていたんですよ。本当に自分の勘があたっているのかって」

慣れた手つきで弾装を抜き取り弾を装填する。

「何発ほしいですか？ 1発、1万でいいですよ」

「・・・やめてくれ。頼む」

「1発、2発、3発、・・・」

「やめてくれ！」

「4発、5発。5万でいいですか？」

無表情に俺は訊いた。正直、やる気はない。鈴木さんが自分の米噛みを撃ちぬかなかつた。ただ、それだけが心残りだ。

「・・・契約を破棄したい」

「無理です」

即答した。さらに俺は続ける。

「ロシアンルーレットってあるじゃないですか？ でも、これオートマ式なんですよ。リボルバーだと入手難しいみたいで。足もつきやすいですし。それでしょうがなくあたらしいゲームを考えたいんです。3日以内に自殺すればそれでよし。4日過ぎればこちらでルールを勝手に決める」

「・・・ルールを勝手に決める？ どういうことだ？」

「契約書うんぬん言いましたがあれは、俺の嘘です。俺が勝手にルールを決めました。契約書には3日どうこうなんて記述なんて最初からなかったんです」

俺はちょっと自分の台詞が矛盾だらけで笑ってしまった。

「正確には、3日過ぎたのち、後は見届人の俺の意志に任せる。これは暗黙の了解です。契約書にはそんなこと書いてません」

「ふざけるな。おい、ふざけんなよ!!」

「ふざけてるのは鈴木さんのほうですよ。自殺したいって言ってきたのに、自殺しない。じゃあ、殺すしかないじゃないですか」

「頼むから、私が悪かった。・・・助けてくれ」

「ゲームはまだ途中です。助けるか、助けないか。俺の裁量しだいです。でも、決めました。今回の自殺ゲームは」

脱着した弾倉を戻し拳銃を鈴木さんに向けた。なにも言わず俺は、ためらいなく引き金を引いた。まず、言い訳がましい顎に1発、論理が破綻した頭部に2発、そして死にたがっていた心

臓に2発。耳障りな断末魔をあげさせることなくいつもこの順番と決めている。血溜まりが広がって行くその中に、ひとり拳銃を片付ける。地下室をあがり、地上にでると安城にその場で電話をかけた。相変わらず1コール目で出てくる。

「松本です。今回も他殺ということになりました」

「わかった。片付けるからそこでまってる」

短い電話を切り、空を見上げた。夕暮れに染まる空が見渡せた。ドラマだったらタバコの1本でも吸いたいたいところだが、生憎吸ったことがない。片付け役が来るのにわざわざ肌寒い外にいるのも苦なので地下室へと戻る。鈴木さんは見事に他殺されていた。一体、誰がこんな酷い殺し方をするのだろう。顎は砕け歯根が飛び散っている。頭蓋骨が圧迫されたせいで眼球も垂れてしまっていた。気温のせいも多少、湯気がのぼっていた。死体をまじまじと見る。狙った箇所寸分違わず当たっている。我ながら微笑んでしまう。仕事の達成感に浸りつつしゃがみ込み、鞆から缶コーヒーを取り出した。死体を眺めながらコーヒーをすすする。死んでしまった肉の塊を眺めつつ飲む缶コーヒーは特別美味しい。

「鈴木さん。人は生きているから価値がある。たのしみましょうよ人生を」

俺は缶コーヒーを飲みつつ、死んでしまった鈴木さんに尋ねてみた。

人生は短い。おまえに残っている時間は有限だ。例えばそれは落ちる砂時計のように。人生とは、産まれたときから始まり、死にいたる終わりあるゲーム。人は試されている。生きるか死ぬか。どうしようもない境遇。突発的な事故。ゲームオーバーは予期しないところにいつでもあった。おまえは今まで生きてきた。生きて生きて、それでも生き抜いた。なのにどうして、おまえはここで途中リタイアしたのだろう。限りあるゲーム。ただひとつ、納得行かないことがあった。おまえが自殺した理由。

「どうして裏切るようなことをしたんですか？」

訊いてもどうしようもない問に一ノ瀬は嘲笑った。

「お前、わかっているのか？ 今やっていることが。さっさと殺せよ」

ヤクザに説教される。そんなときがくるとは思わなかった。一ノ瀬からはいろいろなことを教わった。この仕事について。ヤクザとは、なんなのかさも。俺はこいつが憎い。こいつさえいなければ俺はヤクザなどにはならなかった。こいつさえいなければ。

銃口を向ける。一ノ瀬と名乗るヤクザに。なってやろうと思った。こいつを殺して俺が見届人とかいうトカゲの尻尾に。

「一ノ瀬さん。仕事の先輩として教えてほしいんですよ。どうしてこんな馬鹿なことをしたのか。俺はあんたを憎んでる。あんたが借金の取立人にならなければ、俺は刑務所に入ることもなかったんだ」

処刑場と呼ばれる地下室で簀巻きにされた男へ俺は銃を向けていた。

「撃てよ。それで終わりだろ。安城にそう言われてたんだろ。俺を殺してそれで終わりだ」

一ノ瀬と名乗る男は典型的なヤクザだった。見た目も中身も、どうしようもないクズだ。俺はこいつに関係のない親父の借金を背負わされた。法律的に無効だと何度こいつに訴えただろう。警察は無力だった。結局、死体があがらなければ動かない。それに俺は人を殺している。そんな人間の訴えを警察が聞き入れてくれるとは思わなかった。

「菓を横流しした。それでいいじゃないか。確かにおまえには貸しがある。おまえが出所したとき組織に斡旋したのは俺だからな」

「ふざけるな。おまえが過度の取立てをしなければ、俺は誰も殺さずには済んだんだ」

「おいおい、半狂乱で組員を刺し殺したんだろ？ まるっきり自分のせいじゃないか。あれから元凶の親父も死んだしな。自殺だっけ？ これ以上、借金が増えなくてよかったな」

借金を苦しめた自殺。

最初、一ノ瀬から聞かされたときは訳がわからなかった。親父が自殺した？ ありえない。息子に借金を肩代わりさせるような人間だ。自殺なんてするわけがない。『おまえが、自殺させたんじゃないのか？』刑務所の面会で一ノ瀬にそう言ったことをまだ覚えている。一ノ瀬は言った。『保険金もないやつに自殺させてなんの得がある？ 自殺するのにも金がある時代なんだよ。産まれてから死ぬまで、本当に金のかかる生き物だよな。人間って奴は』その後、俺は出所した。

仕事を探したがある訳がなかった。そんなとき、一ノ瀬が言った。『おまえ、俺のところにこないか。死ぬまでこきつかってやるよ。断ってもいいが、そのときはそうだな。おまえの内蔵でも売らせてもらうけど』

俺はしかたなしに組織に入ることにした。そして一ノ瀬の下でこの仕事を覚えた。いつか、一ノ瀬を殺すことだけを願って。

「やっとこのときが来たんじゃないか。黙って、その拳銃で俺を撃ちぬけよ。今更、ひとりやふたり殺しても大差ねえよ」

俺は疲弊しきっていた。こんな奴を殺すために今まで生きてきたのかと思ったらそれだけで馬鹿馬鹿しくなった。俺の生きる意味はこんなことだったのかとさえ思った。せめてこの場で俺に向かって命乞いしてくれればどれだけ救われただろう。俺は拳銃を一ノ瀬に咥えさせた。躊躇うことはない。この手ですぐにこいつを殺すことができるのだ。俺を睨みつけてくる一ノ瀬。俺は、一ノ瀬を見ながら思った。死にたい奴は勝手に死ねばいい。俺は、引き金を引いた。

¥

絵本の柄を切り取ったような壁紙。幼児向けの室内には机と椅子しか置かれていなかった。居心地の悪さを覚えながら、またここに来たことを後悔した。こんなことになるんだったら黙って胃薬でも飲んでいればよかった。そう考えている隙にドアがノックされた。『はい』と、つい返事をしてしまったが、そこに現れたのはカジュアルな服装の女の精神科医だった。

「おまたせしました。松本さんですね。今日はどうしたんですか？」

メガネをかけた女医は天然パーマなのか、癖毛のあるショートヘアーを気にもせずお人好しな表情をしている。

「今日はその、胃が痛むので。それで、その・・・」

「夜は眠れてます？」

「寝付きもわるいです。仕事柄、不規則なものでして。もらったハルシオンも飲んではいらんですけどね」

メモを診断書に記入して小金井と名乗る小柄な女医は俺に視線を向けた。まだ幼さが残るが俺より年上だろう。三十路なかばか。童顔系の女医が俺に言った。

「最近、仕事で過度なストレスとかないですか？」

「さあ、どうでしょう？」

思い返してみる。

今月に入って8人ほど殺った。少し働きすぎな気もする。仕事に関しては苦ではない。そもそも殺人が本業ではないのだが、結果論としては毎度殺すことになっているだけで、本来ならば金持ち自殺者の営業をしているだけだ。

「食事とかはどうです？ 最近、胃に負担のかかる食生活とかしてませんか？」

「うーん。あ、最近コーヒーに凝っていますね。豆から入れる奴も飲んでます」

「へー。いいですね。1日どれくらい飲むんですか？」

「だいたい、缶コーヒーあわせて15杯ほどです」

にこやかに笑って言うてみたが、小金井先生の表情は固まった。

「それ、ちょっと飲み過ぎですよ。松本さん、好きにも程度ってものがあるでしょ。ちょっと、そうですね。肝機能の調子も疑わしくなってきました。今日は血液検査もついでにしましょう。っていうか、眠れないのもカフェインのとりすぎ!!」

あれだけ温和そうな小金井先生がまくしたてたのは初めて見た。その後、俺は血液は取られ、処方されていた睡眠導入剤も処方されなくなった。先生が言うに、『しばらく様子を見ましょう。松本さんはあれです。カフェイン中毒の気がします。いいですか、今後食事には気をつけてくださいね!!』とのことだ。俺は意気消沈気味に帰ることになった。

¥

「落ち着かない」

文字通りである。全然、これっぽっちもコーヒーを飲まなければ安らげないのである。穀潰しクソアパートの一室で俺は悶々としていた。寒い深夜のワンルームで毛布に包まりながら、テレ

ピをつけた。『人気急上昇中のアイドルグループ、ゲート・キーパー・ベーシック。略して、GKB47です』どうやら歌番組のようだ。しばらく、見ることにした。『イヤイヤヤー、ジサツシチャイヤー!!』今にも発狂しそうな勢いで歌いまくるその姿を見つつ俺は思った。どうして俺はこんなことをしなければならなくなったのか。どうして俺はこんなにも惨めなのか。答えのない問答である。タバコも酒も、パチンコも競馬もしない。そんな俺がなぜ……。

無言で立ち上がり、暗い部屋のなかミルミキサーを探した。テレビの照明だけを頼りにコンロに火をつけ湯を沸かす。手挽きミルに一杯分だけのコーヒー豆を入れゴリゴリと挽く。ペーパードリップに挽いた豆を入れ、やかんから少量ずつお湯を注ぐ。香ばしい香りが鼻腔を満たしてくれる。俺は思った。ああ、このときのために俺は生きてきたんだと。全てを忘れよう。ひとときでいい。今日、この瞬間だけで。今の俺はこのときのために生きています。

自殺を希望する人間には共通するところがある。自分という個が嫌いになる自己嫌悪、それはもっともだが、一番の共通点は死を美化するところだ。人は産まれたときが人生という名においてピークなのだ。言い換えるなら無地のキャンバスにしよう。キャンバスは時と共に作り上げられる。それは自分が筆をとるときもあるが、大抵は他人が懇切に描くか、殴り書きのどちらかである。殴り書きが多ければ多いほど乱雑になると思われるがそうでもない。それが評価される場合もある。人生とはつまり、作品の良し悪しではなく誰がそれを評価するかということ。それしかないのだ。

「調子はどうですか？ 誠司？」

「ええまあ、普通です」

俺を評価してくれるただひとりの人間。安城秀樹。俺はこいつをテレビで見たことがある。見たことがあるというのはそっくりさんなのだが。テレ朝の相棒の杉下右京にそっくりなのだ。内面はまったく違うのだが。事務所に呼び出された俺は安城の言葉を待った。

「日本での自殺者は年間3万人超えだ。しかし、発表では”3万人超え”で留まっている。それはなぜか。検視官不足で見れる限界が3万人だからだ。私はその倍はいると思っている。もしこいつらを有効活用できるのならば、私はそう考えビジネスを企画し運用している。だが、これにも欠点はある。自殺者のほとんどは貧困だ。金になるのはほんの数パーセント。そこでだ、誠司、おまえを呼び出したのはこの新規開拓の手伝いをしてもらいたく呼んだ。私の計画は次のステップに行く。それを手伝って欲しい」

それとはなにか？ 俺は当然、了承した。

「次のステップは、貧困ビジネスだ。簡単にいうと、確実に死ねるドラッグ」

「そんなもの、あるんですか？ 安楽死の薬なんて聞いたことないですけど」

「安楽死なんて生易しいものじゃない。こいつは確実に、相手を殺すドラッグだ」

狭いビルの一室。事務所のそこで安城は俺を見据えて言った。

「合成麻薬クロコダイル」

「ロシアで流行しているこいつを使う。アヘンの3倍強力でヘロインの10分の1の値段で手に入る。中毒者の大半が1年以内に死亡し、平均して2~3年でほとんどの場合死亡する。これをバラ

撒く」

俺は息を飲んだ。噂には聞いたことがある。使用すると、皮膚、筋肉、骨、脳などが体内から壊死していく。しかし同時に鎮痛作用があるためその痛み気付くことはない。クロコダイルという名前の由来は、使用者の身体を腐らせ、まるでワニに噛まれたような身体になってしまうことから命名された、現にロシアを中心としてヨーロッパへ広がっている薬物だ。

「主な成分はリン酸、シンナー、ガソリン。比較的手に入れやすいものばかりだ。こいつを製造し、バラ撒く。もちろん、鎮痛剤も用意しておく。誠司には、いままで黙っていたがすでにあの程度の数をつくってある。あとは、こいつを売るだけだ。ネットでの販売経路は私が受け持つ。その他はお前がやれ」

「・・・いや、しかし。日本人がこれを受け入れますかね。自殺を美化するような人種なんですよ？ できるだけ苦しむことなく死ぬことを目的にしています」

「誠司、これ売るのが私たちの仕事だ。誰も手をつけていないこのときしかチャンスはない。ある程度、数がいけばそこで一旦、切り上げる。これは自殺のPRなんだよ。宣伝といってもいい。後は違う手段を考える。それに、売れないものを売るためにいま私たちがいるんじゃないのか？」

「はあ・・・」

「私たちは常に新しいことにチャレンジしなくてはならない。生き残れないからねえ」
苦笑いで返す俺。こうしてクロコダイル計画は始まった。

¥

「順を追って説明する。このパケを撒く。名前はなんだっていい。最近の流行にはおまえらのほうが詳しいからな。お前らに任せる。逆に統一感がないほうがいいかもな。これを都内主要箇所無料で配るんだ。それらしい奴を絞って。1週間それをやったら、1週間配るな。それを3セットやるだけだ。パケの包み紙にはネット購入するためのアドレスが書いてある。絶対になくすなよ。いいな、じゃあ、解散」

これが見届人の仕事なのかと訊かれたら疑問だ。だが、組織に使われる以上、従わないわけにはいかない。兵隊と呼んでいる下っ端のなかでも信頼できる下っ端数十人で組んだ。もう、後には引き下がれない。

「あの、松本さん？」

「ん？ なんだ？」

兵隊のなかのひとりが訊いてきた。

「俺達もこれつかっていいんすか？」

「ざけんな。絶対つかうなよ。これはドラックじゃない。毒だ。死にたきゃ飲め」

「じゃー、なんでこんなもん配るんすか？」

「それは、あー」

俺は正直、答えに迷った。なんと言ったらいいのかわからない。

「知らん。俺も下っ端だからな。はい、今日は解散、解散！」

そして、月日は過ぎた。3セット終わり、2ヶ月が経った。そろそろ売上が出る頃だろう。結果的にどうなるか、たのしみではある。携帯が鳴った。安城からだった。

「誠司か。売上だが、そこそこだ。しばらくは通販だけでいく。そろそろニュースにもなるころかもな。気をつけろよ」

そこで一方的に通話が途切れた。なにが気をつけろなのか。

俺はその後、気付くことになる。

¥

「松本さん、松本さん！！」

街をぶらついていたら、突然呼び止められた。誰かと思ったら、パケを配っていた兵隊のひとりだった。

「やばいんすよ、あいつ！　なんか、皮膚の色が青くて、裂けてるんっす。手羽先をかじった後みたいに・・・」

俺は手羽先という単語にビクッとしたが、すぐに思い当たった。

「おまえ、なんで使った？」

「え？　いや、俺じゃなくて・・・」

「もういい、そいつんどこ行かせろ！」

街を駆けた。いい歳こいた男ふたりがなにムキになって走ってんだ。畑から見たらそうだろう。俺はそいつにいつかやりたかった。使ったことも問題だが、一番の問題点は、クロコダイルには解毒剤がないってことを。

蒸れたアパートの一室にそいつは居た。ひとり、いや、複数。断面図とっていいだろう。釜

や斧で斜めから切り落としたような傷だった。血は出ていない。アケビの身がパカッと割れるように内部から割れたものと思える。肉が腐っている奴もいる。声をかけても呂律がまわらないらしい。連れてきた奴に聞いたが食事もまともにとれていないしか言わない。どうしろってんだ、クソッ!! 死にたくもないやつが、使うなと言っただろうが。なぜ、こいつらはこうも馬鹿なのか。俺はその時、ふと思いだした。

『これは自殺のPRなんだよ。宣伝といってもいい』

「そういうことかよ。おい、ざっけんなよ!! 兵隊は兵隊ってか? これじゃまるで、トカゲのしっぽ・・・切り・・・」

トカゲの尻尾。俺もそのひとりなのだ。ため息をついた。久しぶりに。そして言った。

「病院つれていくぞ。救急車呼べ!」

「え、でも俺たちパケ配ってたし。薬も・・・」

「馬鹿かおまえら。配ったことは言うな。こうなった経緯もな。絶対に。もし、おまえらが黙っていれば治療費の負担を少しもってやる。いいか、知らない奴にパケを渡された。中身は知らなかった。使ったらこんなナリになった。それだけ言え。分かったか?」

「は、はい」

「俺は、救急車には同乗できない。おまえがしっかりしないで誰がこいつらを守るんだ。仲間だろ、絶対になにがあろうと裏切るな。あとで連絡するから、俺は行く」

「ちょっと、松本さん!」

「あとで必ず、連絡するから」

俺はそれだけ言って、アパートを抜けだした。

駅近くの商店ビルに入っていく。周りに誰もいないことを確認すると安城に電話をかけた。1回目のコール。安城が出た。

「やはり、馬鹿は馬鹿か」

今回ばかりは、安城の戯言につきあっていられない。

「救急車呼びました。これでいいんですよね?」

「ニュースになるだろうな。日本に合成麻薬クロコダイル上陸という見出しかな?」

「やつらの治療費もつようにしてくれないですか?」

「ありえない」

安城は言った。

「トカゲの尻尾に払う金はないよ。なぜなら、トカゲの尻尾だからね」

「俺、降ります。今回だけは、もうできません。これじゃ、テロじゃないですか」

「いいさもう。十二分に宣伝になるだろうしね。誠司は通常の仕事に戻れ。それと、治療費なら誠司の借金に上乘せという形でなら出してやってもいいぞ。トカゲの尻尾どうしなかよくしなければね」

俺は携帯を叩きつけたくなった。しかし、ここで叩きつけたら俺は確実に殺される。一度、組織に関わった以上、抜けることも反旗を翻すこともできない。これはどうしようもない規律なのだ。

「わかりました。借金に上乘せしてください。それで結構です」

「クロコダイルには・・・」

安城の電話を遮り、俺は言った。

「クロコダイルには治療法なんてない。死を待つ延命しか」

俺は電話を一方向的に叩き切った。

「クロコダイル計画は成功した」

兵隊が病院へ運ばれて数週間後、クロコダイルを使用したトカゲの尻尾は全て自滅した。俺は眠りの浅い日々が続き、小金井先生から精神安定剤と睡眠導入剤を再度処方されることになった。季節は巡り春がやってきていた。事務所の窓からは街路樹の青々とした葉が見えた。呑気なその光景に比べテレビではマスコミがこぞってクロコダイルの話題をニュースにとりあげていた。こういうのは確かステルスマーケティングとでもいうのだろうか。俺はぼんやりと霞のかかった頭で考えた。

「クロコダイルの宣伝としてマスコミを利用する。全国に拡散された情報は”確実に死ねるドラッグ”として私たちの元へ帰る。興味本位の者、本気で試してみたい者。客層はどうだっていい。通販での対策も抜かりない。融通の効かない国のレンタルサーバー数カ所まで運営している。元の数は、はいた。追加分も原価が安く作りやすいからどこへいってもつくれる」

「・・・でも、いつかバレますよ」

俺はやる気のない感じで答えた。安城はやれやれといった感じで言った。

「つまらないね。それでは、ひとつゲームをしないか？」

安城は微笑み、ソファーにだらしなく座る俺の顔を覗き込んだ。

「ゲーム？」

「3ヶ月。それ以内に私が捕まれば誠司の勝ち。それを過ぎれば私の勝ち。私が勝ったら、そうですね、クロコダイルのレシピをバラ撒く。というのはどうでしょう？」

「俺が勝ったら？」

「おそらく、私もトカゲの尻尾になるな。捕まれば私は帰ってこれなくなるだろうから、私のもっている金を全て誠司にあげます。もちろん、誠司が情報を流したらゲームオーバーで誠司の負けだがね」

どっちみち俺には勝ち目などないゲームだった。だが、俺が負けても問題ない。俺はこのゲームに乗ることにした。

このゲームは単なる賭ではない。安城は俺を試しているのだ。3ヶ月黙ってればそれでよし、口外するようなら殺す。レシピという奴も安城のことだ。改ざんするだろう。改ざんしたレシピが巷に溢れば、不完全なドラッグが蔓延する。正規のルートで売買するドラッグはどうしても流通量が減るがよりプレミアムがつくだろう。本当に商売上手な奴だ。

家路へと帰る電車をホームで待っているなか、安城の言葉を思い返していた。

『このドラッグは所詮、きっかけに過ぎない。自殺者はクロコダイルを使い朦朧とした状態で次の行動に出るはずだ。使ったら最期、後には引き下がれないからね』

直後、ホームのアナウンスが響いた。人身事故。再開は不明。俺はしかたなしに迂回することにした。代わりの電車に乗り込む。このとき俺は気付くべきだった。背後から俺をつけている奴の存在を。

¥

「お兄さん、暇？ あたし、いまお金ないんだ。2万といたいけど、1万でどう？」

黒髪ショート。目がどこか切れ目の女子高生だった。身体はひとまわり小さいが胸はそこそこある。運動部よりの文化部といった印象だった。

「は？ 俺のこと？」

迂回した次の電車待ちで女が声をかけてきたのだ。駅のだ真ん中で。これがゆとり世代と言う奴か。おれは上から下まで吟味して眺めた。

「お兄さん、変態？ なめまわすんなら別のところでしようよ」

いきなり手を捕まれ引っ張っていく。帰宅する方とは逆の電車に乗り込むと女は俺の耳元で言った。

「断ればここで痴漢って叫ぶから」

電車をしばらく乗り、下車した。鶯谷あたりでウロウロとしていた。振り払うことなど簡単にできた。だが、少しばかり現実を忘れたかった。非現実にある日常。毎日のことだが違った非日常も悪くない。そんな脳タリンなことを俺は考えていた。裏路地に入ると女は盛ったネコのように様子を変えた。

「ちょっと、我慢できなくなっちゃった。触って。スカートの上からじゃなくて」

ショーツの谷間に指先をあわせる。湿り気のある暖かなそこをゆっくり擦る。女のおそこは剃っているようだった。邪魔な茂みはなくクリトリスの突起も指先で確認できた。息が上がり、呼

吸が乱れる。やがて女は小さく呻き、さすっていた指先の湿度が増した。

「キスして」

ルージュの口紅の奥にピンク色の舌が見えた。俺は黙って舌先を合わせる。女は慣れた舌先でこねくり回してきた。飴でもなめていたのか柑橘系の風味がした。女が手を俺の首元へまわす。すると、バチッとなにかが響いた。身体が動かない。膝から地面へと崩れ落ちた。

次に目覚めたとき、俺はアパートの一室に監禁されていた。素人がやったことはすぐに分かった。縛りが甘い。だが縄がナイロンではなく麻のようなもののため、抜け出せない。そうこうしているうちにあの女が現れた。

「お兄さん、目が覚めた？」

あの女だけではない、見る限り4人。同じ制服を着た女がいた。そのうちのひとりに目がいった。どこかで見たことがある。童顔、癖毛、・・・。

「無視しないでくれる？ なぜ、ここにいるか分からない？」

俺は視線を向けて言った。

「誰だよお前ら。最近のゆとりはスタンガン常備かよ」

黒い靴下の足先で顔と腹を複数、蹴られた。次に踵で叩きつけるように頭を蹴られた。

「あたしたち、あんたのバラ撒いたクスリの被害者よ。ここにいるのは被害者と仲間。実名は言ったら探られるかもしれないから。そうね、仮にスタンガン常備してたし、あたしの名前はピカチュウでいいわ。あとの3人は、ニャース、オタチ、モココでいいわ」

女が言うに、釣り目がちの女がニャース、おっとりした顔立ちの女がオタチ、どこかで見たことがある童顔、癖毛の女がモココらしい。

「それで、どうした？ 用件はなんだ？」

「解毒剤だせよ」

「は？」

俺は耳を疑った。

「あるわけねーだろ。テレビ見てないのか？」

「白を切るの？ 仕方ないわね。ニャース持ってきて」

ニャースと言われた女は一旦部屋を出ると数分後に戻ってきた。手には注射器があった。

「言わないとあんたに使ってもらうことになるけど？」

「まて、落ち着けよ。薬の解毒剤は本当にないんだ」

俺は正直、焦っていた。馬鹿な奴ほど扱いに困る。そんなときモココが声をかけた。

「・・・やっぱり、やめようよ。こんなこと。解毒剤なんて本当になかったんだ。姉さんに訊い

たこと、やっぱり本当だったんだ」

モココの発言にピカチュウが不機嫌になった。

「じゃあ、あたしたちどうしろっていの？ 黙って死ねっていいいの？」

ピカチュウ以外の3人は押し黙る。

「もう、・・・わかった。そうだ、こいつを利用しよう。クスリの製造方法を知れば・・・」

そこで部屋のドアがノックされた。一瞬、凍りつく室内。聞き覚えのある声が聞こえた。「カリンいるの？ 私も考えたんだけど病院やっぱり行きましょう。薬をつかったのを責められるのはしかたないわよ。いっしょに付き添ってあげるから」

間違いなかった。小金井先生の声だった。

「だめ、姉さんでてって。いま、取り込み中なの」

しばらく無言のあと、小金井先生は言った。

「わかった。いつでも相談に乗るから。だから、ね。ひとりで抱え込まないで」

それだけ言って、声はしなくなった。

安堵の溜息のあと、ピカチュウは言った。

「で、どうするの？ こい・・・」

今度は俺の携帯が鳴った。たぶん、というかこれは安城からだ。組織から支給されている携帯にはGPSがついている。安城が俺を監視？ まさか？ 俺はピカチュウに出たいと言ったが、ピカチュウは若干、ビビっているようだった。絶対に出るな、そのままにしろ。と言ってきた。数コールした後に、電話は鳴らなくなった。

「もう、イヤ。なんで私達がこんな目にあわなきゃいけないの!？」

オタチが半ば発狂ぎみに叫んだ。声を抑えるようにニャースが言う。

「面倒くさい。おまえにクスリを注射する。自分が病人になれば、嫌でも解毒剤をみつめてくるでしょ」ピカチュウはまくし立てた。「オタチ、ニャース。最期に蹴り殺すか選んで」オタチとニャースは俺に近付き、見下ろしている目が完全に死んでいた。自殺者のそれと酷似していた。クロコダイルは自殺者を増やすためにあるのか、俺は訳がわからなくなった。上下左右に蹴られる。格闘ゲームのそれかサッカーのように。ふっと微笑んでしまった。代わりがわるで蹴りの連打を受けること数時間後。俺は意識が朦朧となっていた。

「死ねよ、クズ」

ピカチュウはそう言って俺の手首を解いた。痣だらけの手首をつかむ。目にしたものは注射器だった。「や、めろ」俺はかろうじてそういった。だが、願いは聞き入れてはくれなかった。針が皮膚を突く。透明な液体が注ぎ込まれた。

気付くと俺はパトカーのなかにいた。窓の外をみると景色が歪んでみえる。隣のパトカーの後部座席では小金井先生が俯いていた。あの4人の女もいる。警官が俺に気付いてなにかいっているがよく聞き取れない。プールの後に耳がつまったような感じだ。身体がだるい。眠りたい。永遠に。この世界にいるのはもう、疲れた。俺は眠るように再度意識を失った。

そこは病院のベッドのなかだった。ここは一体……。上半身を起こそうとして全身の筋肉が悲鳴をあげた。息をするのも辛い。俺はナースコールで看護婦を呼び、水をくれといった。一呼吸して安堵すると薬はまだ微かに残っていた。全身を見回すと痣だらけだった。青い痣、黒く変色した痣。それはクロコダイルによるそれではなく、あきらかになにかで付けられた痣だった。電話が鳴った。病室では遠慮してください。そういった、ナースを横目に構わず俺は電話に出た。安城からだった。

「大変だったね。誠司が折り返しもしないのは不思議に思って警察を向かわせた。ヤクザに転向した元お偉いに頼んだんだよ、これで貸しつくっちゃったね。注射された薬のことは気にしないでいい。少量だけだったのが幸いした。そこでゆっくりしてなさい。3ヶ月いろとは言わな
いが……」

そして、安城は笑いながら言った。

「ゲームは私の勝ちでいいかな？」

「身体の調子はどうですか？」

携帯から聞こえてくるのは安城の声だ。もう、この世で俺のことを気遣ってくれる人間は残念だがこいつしかいなかった。病室のベッドに横たわっている俺はまだ薬の後遺症が残っていた。慢性的なダルさ。吐き気。居心地の悪い嫌悪感は、また薬を使えという甘い囁きでしかない。そして薬の効果が切れるにつれ全身を覆う痣の痛み。点滴を受けるハメになった鎮痛剤。俺は近況を報告すると、電話を切った。寝ようとしたとき小津が病室に来た。

「大丈夫ですか？ 具合悪そうですね」

気遣ってくれる人間。今はこいつもいた。安城が今回の件の始末をするために動けない俺の代わりとして寄越した情報屋だ。小津の言葉をそのまま返してやりたかった。小津は目付きが異様に悪く肌の血色も俺より全然悪い。死体と話しているようだった。

「しかし、あの女子高生たちにフルボッコにされるなんて、本当に羨ましい限りです」

「うるせーよ、馬鹿。取り調べ終わった頃だろ。出所は分かったのか？」

俺を拉致した女たち。俺が薬を撒いたという情報の出所。小津はつまらなそうに言った。

「あいつらはクロコダイルで最初に死んだ兵隊の女だったそうです。情報の出所は兵隊です。どうします？」

溜息をついて、俺は言う。

「女の病状は？」

「末期が3人。初期が1人。3人はまず助かりませんが、1人は摂取量が少ないためか、病態は安定してます。確か、モココとかいう奴です。それと、あの女医ですが薬は使っていないようです」

小金井姉妹は無事。

「末期の3人は薬を使った事故死に見せかける。モココは保留。女医は、そうだな、明日か明後日ここに連れてこい」

小津が不思議そうな顔を向ける。

「殺さないんですか？」

俺は無感情に小津に言った。

「殺すにも金がかかるんだよ」

¥

翌日、小金井先生が病室に現れた。小津も一緒だ。

「・・・やっぱり。あのときの人は、松本さんだったんですね」

疲れきった表情の小金井先生が言った。精神科医でも人間なのだ。目元にはクマができていた。留置所に入っているためまともに風呂にも入っていないのだろう。俺はわざと自分の素性から今までの経緯を全て話した。そして、小金井先生に言った。

「先生には今後、組織に協力してもらいます。事情を話した理由は分かっていますね。この件は、断れません。先生は誰であろうと他言することはできない。了承していただければ妹さんは返します」

俺は喋るのが鬱陶しくなった。できるだけ早く終わらせたかった。

「うちから数名、あなたのクリニックへ出向かせます。そこで毎週、先生は診断書を書いてください。処方される精神薬は我々が指定します。今はそれだけで十分です」

精神安定剤は少なからず需要がある。正規のルートで手に入れる準備をしておきたい。そういうことを言いたかった。先生は黙って俺の話の聞いているだけだった。

「なにか質問は？」

「いえ、・・・ありません」

「小津、あとは任せた。モココは開放しろ。もちろん今回のことは他言するなと言え」

小津は小金井先生と共に病室を後にした。先生は終始うつむいていた。本当にこれでよかったのか、正直なところ分からない。精神安定剤などなくてもうちには代わりになる薬は他にいくらでもある。でも、こうするしかない。殺さないでいられる方法は。

¥

本当にあの2人を開放してよかったのか？ その後、安城にいろいろ探られたが俺はそれらしい理由をつけて返事を返した。もし、先生が内情を誰かに話したら、もし、モココが組織の息のかかっていない警察へ駆け込んだら。たぶん、俺は終わりだ。一方的にリスクの高い賭だった。

俺にはなにも美味しいところがない。なぜこんな面倒くさいことをしているのか自分でも分からなかった。口封じのために殺しておけば、なんの問題も起こらないはずだ。殺すにも金がかかる？ 冗談はよせ、自分が死ぬかもしれないんだぞ。

病院のベッドでふて寝した。1ヶ月ほどが経ち、だいぶ身体は良くなってきていた。日常生活に支障がでないレベルまでもう少しだ。クロコダイルの解毒剤の代わりに防腐剤を点滴されたこともあった。あのときはさすがに驚いたが対処法らしき対処法はそれぐらいしかないとのことだった。モココも小津の話ではほとんど毒が抜けているようだった。少量とはいえ摂取すると取り返しがつかなくなる。依存症が出たとしても姉が精神科医なのだ、問題はないだろう。残念ながら重度の3人は中毒死という形で片付けられた。元はといえば全て俺が悪いのだが。

今更、まともな道へ進むことなどできない。犯罪を重ね続ける人生。死にたがる自殺者よりも死ぬべきなのは俺のような人間だろう。自覚はあるが俺は生きている。俺はまだ死にたくないという意志があるからだ。いや、もしかしたら俺は自殺する勇気がないだけかもしれない。小金井姉妹のことを考えると心の隅で俺は誰かに殺されたいと願っているのかもしれない。もしかしたら、一ノ瀬も……。思い出してしまった。まさかな。死にたいがためにわざと薬を横流した。ありえない。俺は考えることを止めてしばらく寝ることにした。休めるうちに休んでおこう。そう思った。

死にた狩り

自殺ゲーム 最終回 「死にた狩り」

渋谷のスターバックスで少し休憩するつもりだった。まさかそこにモココがいるなど思ってもいなかった。モココは制服姿のまま、ひとりで座っていた。しばらく見ていたが、なにもせずただ窓硝子ごしから見える人ごみを眺めているだけだった。俺はホットコーヒーを飲みながらモココを観察した。平日の午前中。学校はサボりなのだろうか。年齢より幼く見える童顔の目は俺が仕事でいつも見ている奴らと同じだった。

「学校は、サボりかよ？」

都会という人ごみのなかで、誰にも声をかけてもらえない。人が人として機能していないのではまさにごみでしかない。声をかけられた。しかも相手が俺だ。モココは自分に声をかけられたことに驚いたがそれが俺だとわかり、引きつった表情に変わった。俺は少しばかり後悔した。その他大勢の人ごみに徹すべきだったかもしれない。

「ま、まつもとさん。なぜここに？」

「それはこっちの台詞。おまえ学校はどうした？」

モココに了承を得ないで勝手に隣に座る。視線はあえてモココを見なかった。カウンター席からモココが見ていた人ごみを眺めた。

「学校はすでに卒業してます」

「制服なのに？・・・これから、男と会うとか？」

「そうじゃないです。・・・いま、暇なんです」

モココの言っていることがいまいち分からなかった。俺はなにも言わずホットコーヒーを飲みながら、モココの言葉を待った。

「高校は卒業しました。今は進学も就職もバイトもしてないです。たまに街をうろうろしてます。今日はたまたま人ごみが見たくなかったからここに来ました。私、どこか、変ですかね？」

「変？ どこが？」

「あの後から、私、どこか、変なんです。友達みんな死んじゃったし、なんで私だけ生きているのかってたまに思うんです。そう思っていたらなぜか不安が止まらなくなって制服を着て街を出歩いてるんです。もしかしたら、昔にもどれるんじゃないかって・・・。すいません、私、言っていることめちゃくちゃです。すいません」

「まだ若いんだから別にそんな時期があってもいいんじゃないか？ モココが死ななかったのはたまたまだよ。誰かの気まぐれ。・・・まあ、俺がそんなこと言える立場じゃないか。ごめん、

悪かった。じゃあ、な」

俺はどういう言葉をかけていいかわからなかった。面倒だ。場所を移そう。俺は立ち上がろうとすると、横からモココが俺の服の袖を掴んでいた。

「連絡先、教えてください」

俺はモココがなにを言っているのか分からなかった。

「俺とは関わらないほうがいい。おまえもそう思ってるんだろ？」

「最初に声をかけたのは松本さんじゃないですか？」

俺は仕方なしにモココの隣に座る。携帯を取り出す。これも誰かの気まぐれ。そう、俺の。俺はモココに携帯のアドレスと番号を交換した。もちろん組織の携帯ではない。その日は、たまたま飛ばしの携帯をもっていたから。そう、単なる気まぐれにすぎなかった。

※

「松本さん、聞いてます？」

「あ、ああ。どうしたら効率的に自殺者をつくれるか。面倒だな。収容所みたいなところに一旦、あつめてからガスで殺すっていうのはどうだ？ 安上がりだし、その後の処理もし易い。場所を確保できればいけるんじゃないか？」

俺は適当に小津に言ったつもりだった。

「・・・あなたって人は。なかなかいいアイデアじゃないですか。どこかで聞いたような気もしますが、大雑把にみえて実に効率的ですね」

クロコダイル計画は終盤を迎えていた。テレビでは連日特番が組まれいかにこのドラッグが人を無残に殺すか。俺も夕飯後に見たが、お茶の間との温度差が激しい番組だった。免疫のない人が見たらせっかく食べた夕飯がトイレを詰まらせるほどの編集内容。それが毎週流れているのだ。俺的には素晴らしい出来だが一般人はどうなのだろう。安城はクロコダイル計画の終盤に自殺オフの提案をした。アンチクロコダイルと銘を打ち、美しく死ねるを掲げるコミュニティをネットで作る。まさか、この主催者がクロコダイルを拡散させた張本人だと何人が気付くだろう。

「練炭も、そろそろ暑くなりますし終わりですからね。代理品にガス。なんかいまいちです。もうちょっと、風流がきく自殺のしかたないですかね？」

小津がよくわからないことを口走っている。ビジネスとしての自殺はある程度手を打ち尽くした。安城も次のビジネスへ異動すると言っていた。自殺ゲームはこれで手を引く。警察がメディアに煽られているのだ。潮時という奴だろう。自殺オフの件はこちらとしては単なる延長サービスだ。コミュニティのサイトを勝手に作り後は放置する。利益率も悪い。貧困ビジネスとし

ては、クロコダイル以下なのは目に見えていた。

「借金の取立人にでもなるか」

ポツリといった。独り言だった。

「松本さん、真面目に考えてくださいよ」

安城はこの件には手を引く。別の新規開拓に行く。継続の後片付けを引き継がれたのは俺ではなく小津だった。小津はクロコダイルの通販システムの構築を担当していた。そんなことを考えていると携帯のメールが着信した。モココからだった。俺はメールに目を通すと、小津に言った。

「すまん小津。俺、帰るわ」

「え？」

狭い事務所。小津は事務所にひとつしかないノートパソコンの画面から俺に視線を移した。

「ちょっと、なにいつてるんですか？」

「小津、自殺サイトつくるんならな、表面上は出会い系を打ち出したほうがいいぞ。人間の考えることなんてみんな同じだ。死ぬまえに種を保存したい。つまり、死ぬまえにセックスしたがるもんなんだよ。死体として扱われる自殺者としてではなく、まだ生きているうちの人間としてな」

俺はそれだけ言って事務所をあとにした。

¥

絵本の壁紙。患者はそれなりにいた。待合室には水槽が置かれてあった。数匹の熱帯魚、種類はたぶんグッピーとかいうやつだろう。赤と黒の長い尾、銀色に光る胴体のグッピーが水草の間を回遊していた。名前が呼ばれ診察室に入っていく。刺激のすくないカジュアルな服装の小金井先生がいた。

「おまたせしました」

表情が強ばっている。小金井先生が患者のように見えた。俺は黙って椅子に座ると手を出して指を上に向けた。

「ドビュッシーですよ。確か、月の光」

俺は小金井先生をリラックスさせようとしたが逆効果だった。BGMとして流れている音楽を当ててみたが、先生は俺の行動を見て顔が青ざめていた。

「あれから、それらしい人は来てません」

今度は、小金井先生が意味不明なことを言い出した。俺たちはここで、なぜなにをしているんだろうか。

「それらしい人とは？」

「処方箋の、薬の、・・受取人というんですか？」

ああ、そういえば病室で俺は先生にそんなことを言っていた。

「いるじゃないですか。ほら、先生の目の前に」

先生はそこで押し黙ってしまった。俺はなにか悪いことを言ったのだろうか。

「もう、結構です」

俺は言った。

「この話はなかったことにしましょう。俺も違うクリニックに通います」

「ちょっと、まってください！」

立ち上がろうとする俺を小金井先生が呼び止める。

「それは、どういう意味ですか？」

薬を処方しない病院には用はない。意味は同じだが、先生は違う方の意味として受け取っていたようだった。俺は座りなおすと先生にいった。

「最近、眠れるようになりました。理由はわかっています。この仕事はもうすぐ終わります。俺は違う仕事をするでしょう。組織の使いっ走りはかわらないと思うんですけど」

そして、俺は微笑んでいった。

「殺しは、当分しなくてもいいみたいです」

¥

クソアパートへと帰る。アパートの手前で誰かが俯いて携帯をいじくっていた。制服姿のモココだった。俺には気付いていないようだった。

「なにしてるの？」

俺は声をかけるとモココは顔を上げた。

「あの、私・・」

「どうして住所知ってるの？」

「・・診察券の。松本さんの」

俺は溜息をついた。ここで言うておくが俺は溜息を年中つくような人間ではない。だがしかし、ここ最近なぜか溜息が後を絶たない。

「そういうのいけないんだよ？」

「すいません」

「あがりなよ。暇でしょ？」

モココを自分の部屋へとあがらせる。

「失礼します。・・・意外と綺麗な部屋ですね」

「なにもないだけ。余計なものは鬱陶しい質だから」

俺はやかんに火をつけた。コーヒーの豆をとりだす。手挽きミルにふたり分を入れてゴリゴリと豆を挽く。モココは座るところが見つからないのか立ちっぱなしでいたが俺は適当に座るように言うと案の定、ベッドに腰を下ろした。

「今日はどうした？」

「・・・メール、・・・送った。その・・・」

沸騰したお湯でゆっくりコーヒーをいれる。香ばしいコーヒーの香りが部屋を包んだ。

「自殺したいって悩み？　そういうの姉さんに言ってくれないかな？」

「姉さんは、私のことなんて・・・私のせいでこんなことになったのに」

俺はコーヒーのカップを持ってモココの隣に座った。

熱いから気を付けて。モココにコーヒーを手渡す。湯気に息を吹きかけてモココはコーヒーを飲んだ。俺も飲む。

「おいしい」

そうだね、と俺は言う。

しばらくお互いに会話のないまま、コーヒーを飲んでいた。飲み終わって、モココは深呼吸してから言った。

「私、どうしたらいいでしょう？」

「なぜなぜ？」

「違います。相談です」

「俺に相談しても、ろくなことないよ」

「松本さんに答えて欲しくて、いまここにいます」

沈黙のあと、俺は言った。

「たしか、自殺したいとか、メールでいったな？　だけど、モココ。普通の人には死にたいなんて思わない。生きてきた内容がどうこうじゃない。今、精一杯生きていれば死にたいなんて思わないんだよ。まっとうに死にたいんなら、まっとうに生きろ。そうすれば今よりかは、マシな死に方ができる。安楽死？　そんな方法があるとすれば、いま言ったことだ。悔いを残すな」

「でも、私。・・・どうすればまっとうな生き方ができるのか・・・」

「姉さんに恩返しすればいい。助けてもらったんだからな」

モココは黙る。俺は、また溜息をついた。

「引越すよ、俺」

空のコーヒーカップを凝視していたモココが顔を上げた。

「クリニックにも、もう行かない。おまえたち姉妹は自由だ」

「そんなつもりでいったんじゃ・・・」

「俺が決めたことだ。モココには関係ない。もう、帰れ。2度とここには来るな」

俺はモココを一方向的に部屋から追い出した。夜道を歩くモココに気を付けろよと声をかけた。しばらく夜道を歩くモココを見つめていた。モココが振り向き、俺と目が合った。片手をあげた。バイバイ。俺も、バイバイした。

誰もいなくなった部屋。

俺はやかんに再度、火をつけた。豆を挽くのが面倒になってさっきつかっていた豆で淹れた。若干、薄くなったコーヒーを飲む。半分ほど飲み干すと、ベッドに戻った。モココが座っていたベッドの下。暗闇のそこへ手を伸ばす。オートマ式P220。弾倉を抜き確かめる。1発だけ弾が入っていた。